

「集約化・撤去」に関する短期的な数値目標の記載例

(2) 対策内容

平成 26 年度から令和元年度までの点検結果に対する主な対策として、対策区分Ⅲの橋梁について以下の対策を行いました。

◆ 鋼桁再塗装



◆ コンクリート床版 断面修復



◆ コンクリート床版橋 断面修復



◆ ボックスカルバート 断面補修



(3) 集約化・撤去

迂回路が存在し集約が可能な橋梁について、令和 5 年度までに 2 橋程度の集約化・撤去を検討します。

「新技術等の活用」に関する短期的な数値目標の記載例

4.5 今後の取組

(1) 維持管理の更なる高度化，効率化

予測保全^{*}の導入に向けて，維持管理の高度化，効率化を図ることとし，AI/IoT等のデジタル技術等の導入を進めます。

- ドローンや3次元データを活用した施設点検等の効率化
- 床版点検車を活用した非破壊検査による点検の高度化
- センシング技術等による劣化状態の把握や劣化予測技術の構築

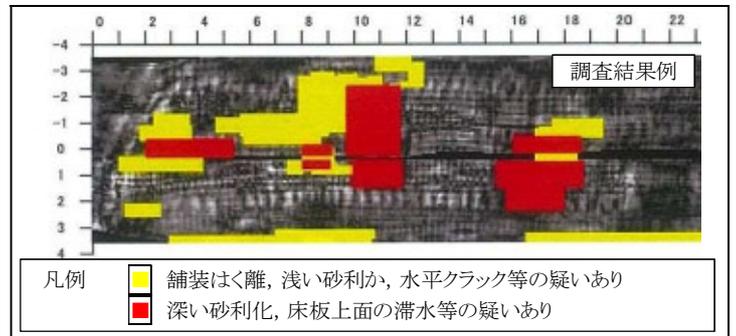
※：これまでの予防保全型や事後保全型の維持管理について，センサーデータ等の蓄積・分析によりインフラの劣化予測精度を向上させ，最適な時期に最適な工法で補修していく考え方

【新技術等の活用の令和3年度から令和7年度までの短期的な数値目標】

管理する4,222橋のうち，約1割の橋梁で新技術の活用を目指します。



図II-9 ドローンによる点検状況



図II-10 床版点検車とその解析画像

6. 橋梁長寿命化修繕計画による効果

計画的に予防的な補修を行うことで維持管理費用が縮減できます。今後 60 年間の橋梁維持管理費用を、事後保全と予防保全で試算し、比較した結果、約 4 割のコスト縮減が見込まれ、橋梁の長寿命化を図ることで、ライフサイクルコスト(LCC)が縮減できます。

また、年度毎の維持管理費用を平準化させることで、財政に集中的な負担をかけません。

(図 6-1)

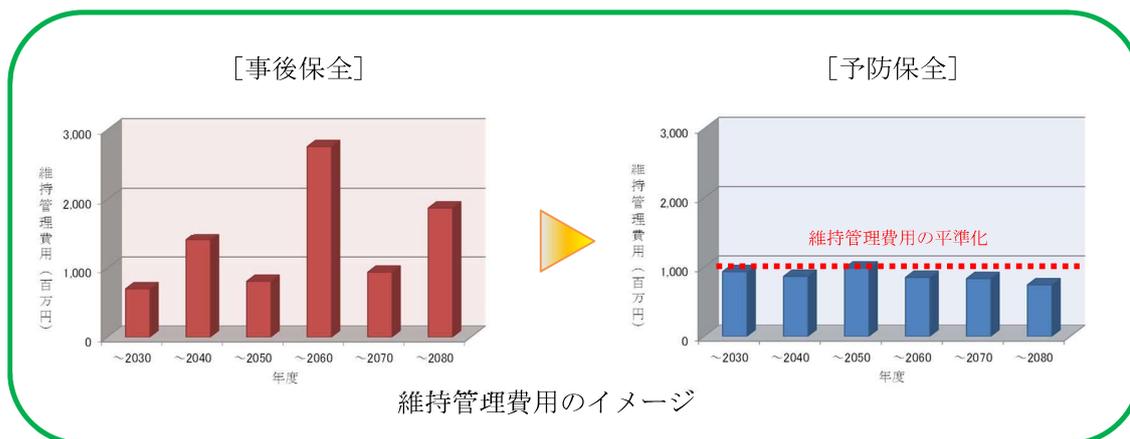


図 6-1 コスト縮減効果グラフ

7. 新技術の活用

2 巡目の定期点検からすべての橋梁で新技術の活用を検討する。

特に 1 巡目の定期点検で橋梁点検車及び高所作業車を使用した橋梁(管理橋梁の約 2 割)については、新技術の活用を重点的に検討し、令和 7 年度までの 5 年間で約 2 百万円のコスト縮減を目指す。

修繕工事においても、すべての橋梁で設計段階から新技術の活用を含めた比較検討を行う。

特にコンクリート造の橋梁(管理橋梁の約 8 割)については、コスト縮減が図れる有効な新技術は積極的に採用する。

8. フォローアップ

定期点検により毎年新たに発見される変状に対しては、適宜見直し(フォローアップ)を行う。